

神田外語大学グローバル・リベラルアーツ学部（千葉市）は、学生が世界各地の実情を現地で学ぶ取り組みに力を入れている。1年生はリトアニアやエルサレムなど4カ所のいずれかを約2週間訪問。3年生になるとニューヨーク州立大学へ留学する。いずれも必修だ。世界の現実を目に焼き付けることで、自ら考え平和の維持に役立つ教養や行動力を養う。

UPDATE 知の現場

日には1年生の20人がこの地に降り立った。学習テーマは「人道」や「20世紀以降の中東欧史」だ。現地の協定大学の先生の引率で、旧市街や杉原記念館、同国の20世紀の激動の歴史を紹介する博物館、多くの十字架が並ぶ十字架の丘といった場所を巡った。



東日本大震災の被災地を視察する神田外語大の学生（福島県双葉町）

めぐり「宗教の多様性」「イスラエル・パレスチナの歴史」を学習した。そのほかの

ールドワークが中心だ。参加した学生からは「自分の考えがいかに関心を持って学べた」という声が上がった。グローバル・リベラルアーツ学部は入学直後の半年間について、学生一人ひとりが「自分は何を学び、世界に対して何ができるのか」を考え、目指すべき道を探るための期間と位置付ける。

1年生はリトアニアなどの学習ツアーに出かける前の6月に事前学習も受けた。さらに海外の実情を学ぶ前提として、日本の実情を現地で知ることでも大切と考え、東日本大震災の被災地、福島県双葉町を6月に視察した。

復興は進むものの、人けの少ないこの町を学生は徒歩でめぐった。原発事故の被害などを伝える資料を展示する東日本大震災・原子力災害伝承館を見学。近隣住民から話も聞いた。参加者の五井愛渚さんは「自分の目で見る大切さを知った」と話す。

国内外での体験学習を糧に、学生は専攻分野の学びに入る。3年生の後期にはニューヨーク州立大学に4カ月留学する。1期生は2023年に渡航する予定だ。専攻分野を深掘りし、世界から集まる学生と切磋琢磨（せつさたく）

ま）しながら教養を磨く。金口恭久副学長は「海外での2度の学びを必修にしている日本の大学はほとんどない」と強調、他大学の国際教養系の学部との差異化を狙う。

神田外語大は「言葉は世界をつなぐ平和の礎」を建学の理念とし、1987年の開校以来、外国語学部の1学部で運営してきた。しかし、グローバル化の進展などに対応するために18年から新学部の創設を検討。21年に創設したのがグローバル・リベラルアーツ学部だ。学生とともにエルサレムや双葉町を訪れた金口氏は「日本や世界の各地で、難しい課題に真っ正面から向き合い解決できる人材を育てたい」と意気込む。

（滝沢英人）

国内外の実情、現地で学ぶ